ナイジェリア雑感

藤井　清

はじめに

国際協力事業団の半乾燥地域森林資源保全開発現地実証調査事業の長期調査員として，ナイジェリアに行く話が海外林業コンサルタンツ協会から私にあったのは1985年7月末であった。私の海外経験はマレーシア，インドネシア，パプアニューギニア，ソロモン諸島，フィジーといわゆる南方諸地域で日本との時差3時間以内の所ばかりで，地球を東西に行っておらずナイジェリアが西アフリカのどこにあるのかもよく知らなかったので，先ず世界地図をひらくことからナイジェリアについての勉強が始った。出発前に得た知識と現地での見聞を以下述べることにする。なおナイジェリアという国名は今世紀の初頭のころイギリス人総督夫人であったジャーナリストが提案した地名で，“黒い”というラテン語からニジェール，あるいはナイジャと呼ばれるようになった川に由来しているとのことである。

ナイジェリアのあらまし

位置，面積：地図でみるとアフリカ大陸は非常にスマートな人間の頭蓋骨を右に向けた形に似ており，地中海に面した頭頂部にアルジェリアがあり，大西洋に面した後頭部の凸部には黒人作家アレックス・ヘイリーの小説『ルーツ』の前半の主人公クンタ・キンテの故郷の国，ガンビア国がセネガル国に囲まれて位置しており，この凸部から海岸沿いに下るとフランス語の象牙海岸となるコートジボアール国（英名でアイボリーコースト），ついでかつての英植民地時代の名のゴールドコースト，黄金海岸のガーナ国があり，これに連なってその昔奴隷海岸といわれたナイジェリア連邦共和国がある。ナイジェリアは南がギニア湾に面し，西はベナン人民共和国，北はニジェール共和国からサハラ砂漠に接し，東北はチャド湖をへだててチャド共和国，東はカメルーン連合共和国と，いずれも旧フランス領諸国と境を接している。経緯度では北緯4度20分から14度，東経2度40分から14度30分にまたがり，南北が約700 km，東西が900 km の矩形に近い形をした国で，面積は923,146 km^2 で日本の約2.5倍である。

FUJII, Kiyoshi: Impressions of Nigeria
(社)南方造林協会

表-1

			1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
ラゴス	気温(℃)	最高	33	33	33	34	33	31	30	30	31	31	33	33	
		最低	20	22	22	22	22	22	22	21	22	21	22	21	
	雨量（mm）		28	46	102	147	279	462	264	66	140	206	71	25	1,836
カドナ空港*1	気温(℃)	最高	32	33	35	34	32	29	25	27	29	31	34	32	
		最低	16	17	18	22	21	20	19	19	19	19	16	14	
	関係湿度(%)*2		15	14	19	36	53	62	70	73	63	46	23	17	
	雨量（mm）		1	1	14	71	149	173	223	262	296	101	11	2	1,304
	降雨日数		0	0	2	5	12	16	17	21	22	8	11	0	
カノ	気温(℃)	最高	36	33	41	42	41	38	34	33	34	35	37	35	
		最低	9	11	14	19	21	19	19	18	19	16	13	11	
	雨量（mm）		0	0	3	8	69	119	208	312	140	13	0	0	872

注） *1 カドナ空港の観測値は1949年―64年の16年間平均
*2 関係湿度はグリニッチ標準時15.00（ナイジェリア時刻16.00）のもの

地勢風土：ナイジェリアの地勢風土は南から北へ降雨量が減少するに従って帯状に分かれている。最も南の海岸線から20～90 km 幅のマングローブの生いしげるマングローブ林湿地帯（mangrove and swamp），その北が100～200 km 幅で海抜500m以下の起伏の多い熱帯雨林帯（rain forest），さらにその北側はサバナ帯（savanna）で約500 km にわたるまばらな森林および草原地帯がつづき，最北は広大でゆるやかに起伏する高原となりニジェール国サハラ砂漠に連なる。このサバナは更に3つに区分され，南部は森林と丈の高い草の生育するギネア・サバナ帯（Guinea savanna），その北部は草地と樹木が点在するスーダン・サバナ帯（Sudan savanna），さらにその北には丈の低い草とトゲの生えた低木，灌木しか生育しないサヘル・サバナ帯（Sahel savanna）となっている。

おもな河川はナイジャ（Niger）河とベヌエ（Benue）河の2つで，ナイジャ河は遠くシェラレオネ国の山中に源を発し，ギニア，マリ，ニジェールを貫流したのちナイジェリアの北西より東南に流れ，ナイジェリアのほぼ中央で南流してギニア湾に注ぐ全長4,200 km のアフリカ第3位の大河であり，18世紀末から19世紀半ばまでニジェール河の源泉はどこかと多くの探険家たちの冒険の対象となったことで知られている。

ベヌエ河はカメルーンに源を発し，ナイジェリアの東より西流してナイジャ河の南転地点で合流している。ベヌエ河の北側180 km にあるジョス（Jos）を中心とする一帯は海抜1,200 m 内外の高原地帯で，最高は1,800 m に達し避暑地として知られており，ジョスにあるジョス大学医学部に JICA の保健医療協力プロジェクトが1982年より開始され，日本から専門家が派遣されている。

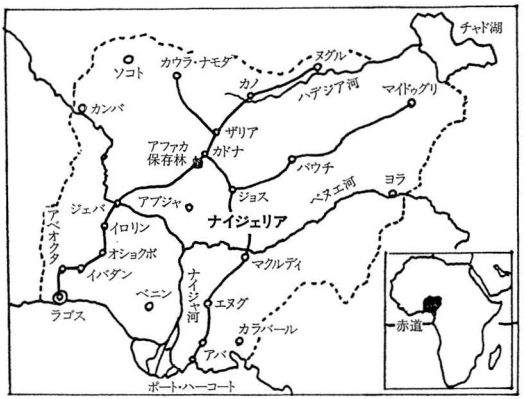
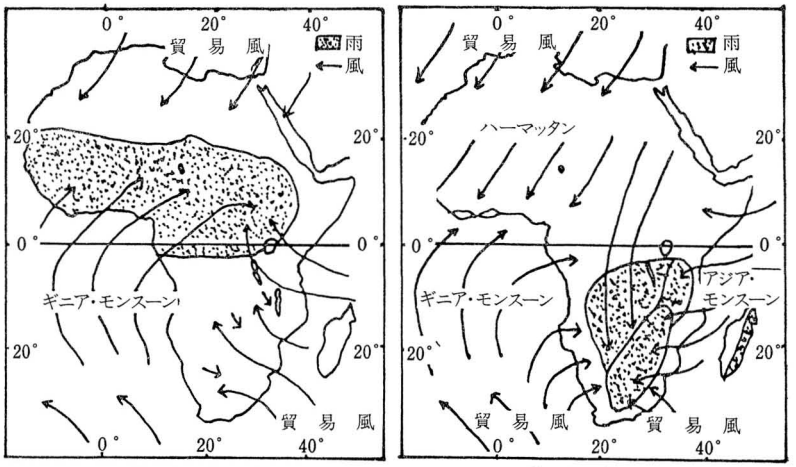


図-1

気候：ナイジェリア全土は熱帯性気候に覆われ，季節は雨季と乾季に分けられる。大西洋のギニア湾からの南西風が高温多湿気団をもたらす5月～10月が雨季で，11月～4月の間はサハラ砂漠の高温乾燥気団が南下するため乾季となる。もっとも南北10度にわたる大国なので，南部と北部ではきわだった相違がある。この比較を南部海岸湿地帯に属するラゴス（Lagos）市と北ギニア・サバナ帯に属するカドナ（Kaduna）市の郊外で今回のプロジェクト予定地に近い空港，北部スーダン・サバナ帯に属するカノ（Kano）市の3箇所の毎月の最高，最低気温および降雨量を示すと表-1の通りである。理解を深めるためにアフリカの気候模式図を参考に掲げると図-2の通りである。

南部ナイジェリアの熱帯雨林帯では平均年間降雨量が2000 mm～5000 mmに達し，4月上旬から10月下旬にかけて集中的に降り，強い風と雷を伴ったスコールとなる。11月から3月にかけては乾季でとくに12月～1月にはサハラ砂塵を含んだハーマッタン（Harmattan）とよばれる熱風が吹き，真昼の太陽が夕日のように輝きを失い霧がかかった様になり，ラゴスでも室内に砂塵が入り埃りっぽくなり気温も湿度も下が



4月から9月の風と雨　　10月から3月の風と雨

図-2

る。北部ナイジェリアは南部と対照的に乾季が長く10月中旬から6月上旬までは雨が殆んど降らず，内陸のため1日の気温が14℃から41℃と大きく変化する。空気は極度に乾燥し湿度は10%を割ることが多い。カドナ市は北部ナイジェリアに属するがカノ市の属する Arid 帯でなく，Semiarid から Woodland に属するため調査期間中の9月下旬から10月半ばまでは，夕方から夜に強い風と雷を伴った大粒の雨がたたきつける様に降る日が何回かあったが，10月半ば以後は無降雨日が続いて太陽がかすみ遠景はもやがかかった様になり，人々はハーマッタンがやって来たと云っていた。ハーマッタンが強い日は飛行機の離着陸が出来なくなり欠航する事がよくあるとのことであった。

人口，部族：ナイジェリアの人口は1981年の推定では8,760万人とされているが，現在では1億に近いのではないかと云われており，アフリカ大陸で最大の人口を擁する国である。しかし人口調査については部族対立を背景として，水増しが行われるため正確な数を把握することが困難とされている。ナイジェリアにはイスラム教徒であり遊牧民の血をひく北部のハウサ／フラニ族，キリスト教徒が多く頭のよい東部のイボ族，歴史上何回かこの辺を制してきた西部のヨルバ族の3大部族をふくめ，言語，宗教，風習を異にする248の大小部族がそれぞれ閉鎖的社会を形成し相互の間の交流は少ない。ナイジェリアの社会とくに政治を分析するとき3大部族を中心としたこれら諸部族間の対立，均衡という視点は不可欠であるとされている。またナイジェリアのみでなく他のブラックアフリカ諸国についても云えることであるが，近代国家としての独立はヨーロッパ諸国による植民地支配時の分割，枠組み作業を基礎とし，部族，地形界等と関係なく成立したことに注目してみると，部族中心の伝統的社会と必ずしもそれから自然発生してきたわけでない近代国家の形成という二つの命題の対立が存在し，これがブラックアフリカ問題の根底にあることがわかる。現在ナイジェリアは19の州と連邦首都領域（アブジャ）から構成されており，連邦首都はラゴスで人口は衛星都市をふくめ300～400万人といわれ，日本大使館がおかれている。連邦首都を新たにナイジェリア中央部にあるアブジャに移すべく建設中であるが，設計を丹下健三都市建築設計研究所が行った事で知られている。石油価格低落，国家経済の行き詰まりから新首都建設はスローダウンし細々と続いている程度である。

クーデター：私の調査出発は1985年8月29日の予定であったが，出発直前の8月27日夜のテレビニュースでナイジェリアで26日夜クーデター発生の知らせがあり，空港，港湾および陸路の国境閉鎖，都市の夜間外出禁止，日本大使館からの連絡では同国内の639人の在留邦人の無事確認，残り46人の安否確認中，ラゴス及び各地とも暴動発生なく平穏との事であった。出発延期となり9月10日日本政府の新政権承認にもとづき9月18日出発した。ナイジェリアでどのくらいクーデターがあったのか，の歴史をかいつまんでみる。白人の渡来は15世紀後半ポルトガル船来航にはじまり，奴隷貿易が開始され18世紀末には毎年10万人に及ぶ奴隷が西アフリカから積出されたとされ，ラゴスはその主要港で奴隷海岸の名が残った。19世紀以降100余年にわたる英国支配の後，1960年10月1日ナイジェリア連邦として独立。アジキウエ大統

領を元首とする共和制で発足。1966年1月及び7月の第一次，第二次クーデターで軍事政権登場。1967年7月ビアフラ内戦突入，100万人以上が戦火と飢えで死亡。1970年ビアフラ軍降伏2年半の内戦終了。1975年7月軍部による無血クーデター。1976年2月クーデター未遂，しかし国家元首は暗殺。1979年10月13年ぶりで民主政治復活。1983年12月軍部によるクーデター。1985年8月再び軍部によるクーデターで現在に至る。軍事政権で議会はない。独立後25年間にクーデターは未遂を含め6回あったことになる。今回のクーデターは戦車，装甲車等が出動したが発砲はなく無血クーデターであった。

交通：日本からナイジェリアに行くにはヨーロッパ経由が便利で，ラゴスへはロンドンからブリティッシュカレドニア航空(BR)，ナイジェリア航空の便がありその他パリ，チューリッヒ，フランクフルト，ローマ，ニューヨークからの便もある。私は往路は日本航空でアンカレッジ経由ロンドン，翌日BRで北部ナイジェリアのカノ経由ラゴスへ，所要時間約7時間，復路はアリタリア航空でラゴスからローマへ直行5時間，翌日ローマ発ニューデリー，ホンコン経由成田着所要時間18時間であった。

入出国：ナイジェリアの入出国にはコレラ，黄熱病予防接種証明書，ビザ，入国カード，税関申告書の外に外貨保有申告書を提出するが，申告確認のスタンプを押された外貨保有申告書は大変重要で，ドルをナイジェリア通貨のナイラ（Nira，1 Nira≒US$1.11）に両替時に銀行が両替額を申告書に記入し証明スタンプを押すが，出国時にこの申告書の外貨残額と手持ち外貨残額が一致しなければ外貨法違反に問われるので，正規以外の両替や，ドル現金での支払いは出来ず，また困ることは両替したナイラが出国時残った場合ドルに両替出来ないことで，かつナイラの国外持出しは20ナイラまでに限られている—もっともナイラを持ち出しても両替も使い様もないので紙切れに過ぎなくなるが—ので多額のナイラが残らない様両替に気を使うことであった。また外貨の両替額が少なすぎると申告外の外貨の持込み闇ドル売りの疑いをかけられ面倒なことになる話や，出国時のボディチェックで外貨額が一致せず別室に連れこまれて応分の金を払って解放された話など在留邦人から聞かされた。税関検査も仲々のもので大変厄介なものであるが私の場合は大使館員の方が中まで入って来て種々アテンドして下さったので出入国の諸検査手続きがスムーズに済んだ。しかし，一般の人の場合はいくつもの関所を通るわけで，通関時にトラブった話は数多くきかされた。

所がまた一方通関屋なる不思議な存在があって，空港内に入って種々アテンドをし税関検査をスムーズに済ませてくれるという。もちろん相応の経費は支払う由であるが，トラブルを避けるため腕の良い通関屋を使って，日本からの来客や出張者をアテンドするのも現地駐在商社員の仕事のうちですよとの話であった。ナイジェリアでは米，食料品の輸入禁止及び制限があるが，ある商社の例でみると駐在員のために日本食料品を船便で送っており，ラゴスで通関屋を通して通関し入手している。通関屋が関係先に支払う金（現地でダッシュと云う）を含め諸費用を計算すると，日本での価格の約20倍の値段のものを食べているとの事であった。ダッシュの力をかりないと日本食品が手に入らないという難かしい通関事情をきいてから，現地で口にした日本食

品は正に貴重品の感を深くした。

検問：ラゴス空港到着後大使館の車で宿舎まで行く暗い道路で黒い顔の銃を持った兵士達が検問しているのにぶつかったのがナイジェリアに来てはじめての検問であった。その後ラゴスでもイバダン，カドナでも随所で検問が行われていた。外交官ナンバーの車の場合は徐行でOKとなったが，ラゴスから166 km 離れたイバダンの林業試験場（Forestry Research Institute of Nigeria 略して FRIN）に行く途中，車が渋滞しており，少しづつ進んで行くと道路にドラム缶を立てて3車線を1車線にして検問中であった。車がチャーターした営業車であった為か，検問中の軍人がピストルを抜いて我々の車にストップを命じ検問した。結局調べはOKとなったが，抜身のピストルをつきつけられたのは無気味で，緊張のひと時でかつてない経験であった。ナイジェリア滞在中は何かにつけて注意深く緊張した気持でいないと，何が起るかわからないという感じで過したが，写真を撮る事も要注意で，人物を断りなしに撮ると文句をつけられて，カメラやお金を取られるから街で不用意にスナップを撮らない様に，と大使館員から事前に御注意を頂いた。また，ある人から空港で到着記念に写真を撮った所，別室に連行されて空港，港湾，橋などは撮影禁止なのに撮ったとして責められ最後はお金を取られて解放された話をきいたが，我々もアブジャで建設中断している大統領宮殿を車の窓から撮った所，身分不詳のハウサ族衣服の男が飛んできて車を止め，窓から手を突込んでカメラを取上げ様とした一件があった。

運転手の黒人がハウサ語で長い間やりとりしてカメラを取られる事なく収まったが，スナップも気易く撮れないお国柄であった。ナイジェリアならではと感じた事は，自動車の盗難が非常に多いため防衛策としてドアのロック以外に二重三重の仕掛けをしている事で，ダッシュボードの中にある鍵穴でロックすると車を盗んでも少し走ったらエンジンがストップする装置を取付けたり，アクセルとブレーキのペタルを固定する金具を下車時取付けロックするもの，更に用心の良い人はボンネットを開けて配電盤の部品を取っておくなどの方法をとっていた。

次にラゴスからカドナへ国内線の民営航空 Kabo Air で行ったが，アテンドしてくれる人が居なければ大変なことだと感じた次第，まづチェックインで荷物の超過重量が28 kg あった所，係員が正規なら25.2ナイラの超過料だが20ナイラ呉れれば超過なしで通すと持ちかけられた事，次に出発時刻が過ぎたのに遅れるとも，何時頃出発予定とも何にもアナウンスが無かった事，出発予定時刻から1時間以上経ってから乗客のトランクを積んだ荷台車を職員が押して来ると，折から着陸してスポットに止まろうとしている飛行機目指して案内のアナウンスも無いままに乗客が一斉に駆出し搭乗口の下に列を作る事。これは座席指定でなく早い者勝ちで，座席数より搭乗券を持った乗客が多かったり，政府高官，軍人などの割込みがあったりすることがよくあり，列の最後尾の方になると搭乗券を持っていても乗れない事になるので，我れ先にと駆け足で陣取り合戦となる次第。

カドナ市：ラゴスからカドナまで道路図によると約925 km で，ジェット機で1時間5分の飛行時間の所で，1900年に英国の北部統治のための行政都市として発足し，

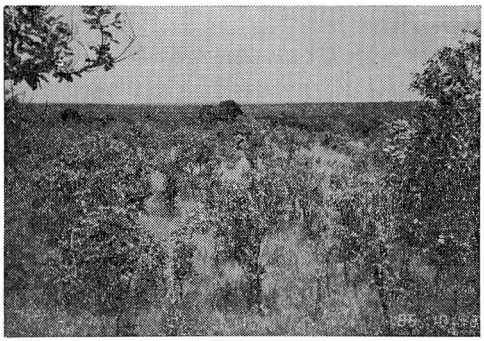


写真-1 プロジェクト予定地
（アファカ保存林の一部）

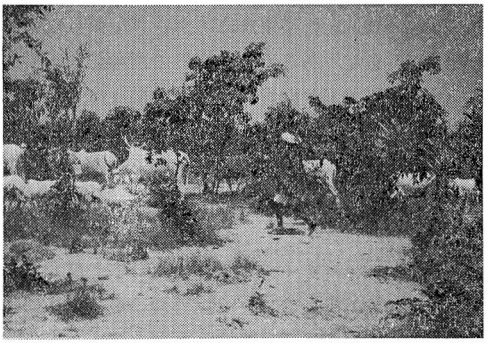


写真-2 プロジェクト内の放牧

現在はカドナ州の州都で諸工業が誘致されており，繊維，ビール，製紙，石油精製工場などがある。人口は約100万人といわれ日本の海外紡績投資（株）とナイジェリア合弁のアレワ紡績 Arewa Textiles Ltd.（1963年設立）の工場や，千代田化工と大成建設の手により1980年に日産10万バーレルの精油所が完成操業しており，どちらにも日本人が働いている。カドナの気候は前記の通りでラゴスよりも空気が乾燥し陽光はきびしいが過しやすい。イスラム教徒のハウサ族が人口の72%，キリスト教徒10%弱といわれている故か，ハウサ族のイスラム式の帽子をかぶり，大きな袖のついたゆったりした袋に頭を通した様ないわゆるアルハジスタイルの男性が官庁，会社，街中でよく目につく。

プロジェクトサイト：カドナ市からラゴスへの国道A125を西に10 km～18 km行った道路沿い南側の約2,700 haの保存林内に500～700 haの造林地を造成する予定である。地況は標高約640 m 前後の国道から南側に向って下っているゆるやかな斜面で，所々砂岩があるが全体に赤褐色の砂質壌土よりなっている。FRINとFAO/UNDPによる土壌調査報告書（1971）によれば，土壌層が深く排水性の良い土壌地帯，土壌層は浅く排水性の良い土壌地帯，土壌層は深いが排水性の劣る土壌地帯，各種混じった土壌地帯と区分しさらに夫々の土壌タイプで細分して土壌図が作られている。現地を踏査してみると，樹木の成育に適している Dandadi soils の所は樹も多く樹高もやや高く下草も丈が高いが，Fadama soils はやせて草地となっており，また固い岩盤状の Ironstone outcrops や Ironstone hills が出現している所があり，東南アジアの熱帯降雨林で見られなかった土壌をみて，半乾燥地の自然の厳しさを感じた。植生は樹高5～7 mの *Isoberlinia doka* を優占樹種とする疎林でたまに高木の *Khaya senegalensis* やヤシ科の *Borassus* spp. が点在して平坦な地形の中で目標物となった。予定地内には移動耕作者はいないが放牧は行われている。当地の降雨状態から植付適期が6月～7月の2か月間に限られるので，これに標的を合わせて植つけ前年の雨季の土壌の湿

っている時に，大型ブルドーザーによる地あけ，寄せを行い，乾季に入って焼却し，植つけ年の雨季に入って機械による耕起，砕土を行い灌水して養成のポット苗を植えつける。下刈は植えつけ後当年雨季中に機械による耕耘を行う。半乾燥地域では雨季中の降雨を土中に蓄えて，乾季に造林木がこれを十分利用出来る様にするため，地表の耕耘により雑草との水分競合を除き，表土の毛管を切断して地表よりの水分損失を抑えることが肝要で，これら諸作業を大型機械により行い機械化技術体系の確立をこの森林造成事業の目標として計画されている。アファカ保存林の一部にFAOの協力によるFRINの試植林があり，*Pinus*, *Eucalyptus*, *Gmelina*, *Swietenia*, *Tectona* などの導入試験，産地試験等が実施されている。その結果からプロジェクトの造林樹種としてFRINより，*Eucalyptus camaldulensis*, *E. tereticornis*, *E. citriodora*, *E. cloeziana*, *Pinus oocarpa*, *P. caribaea* が推薦されている。利用目的はポール，燃材，パルプ原料とされている。

写真-3 落花生売りの少女（むし落花生が頭の上の空缶1杯10コボ（27円）

マラリア及び熱病：1980年度のナイジェリアでのマラリア罹患数は約117万人との報告があるが，ナイジェリアを中心とする西アフリカのマラリアの88～95%は熱帯熱マラリアで，マラリアの中でも一番悪性で症状が不安定で治療が遅れると，マラリア原虫が等比級数的に赤血球を喰食し，血管内に充満した赤血球の残骸が脳栓塞，腎不全—尿毒症を併発することにより放置すれば死に至るという。予防薬としてクロロキンの定期服用は絶対欠いてはならないが，マラリアの他に赤痢，コレラ，チフスの予防にも十分気をつけなければならない。大使館の医務官から，以上の病気のほか，蚊，ダニなどによって媒介されるアルボウィルスがアフリカには数多くあり，都市生活者はこのウィルス疾患に罹ることはまず無いが，原野山林等の現業の場合は日本人が経験したことのない感染症—熱病もみられるということを認識して欲しい，と云われた事を附記し，今後ナイジェリアでのプロジェクトに従事される専門家の方々は，きびしい気候条件，未整備な衛生環境，異文化の中で生活されるに当たって，どうか肉体面，精神面ともに健康で過されることを祈る次第である。